

# PHD

PEACE, HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

## LETTER

# 99

## 2006.6

PHD運動とは1962年よりネパール、東南アジアを中心に医療活動に従事した岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和 (Peace) と健康 (Health) を担う人づくり (Human Development) をすすめ、共に生きる社会をめざし、1981年からはじまりました。

- 2006年度 事業計画
- 研修生レポート 24期生紹介
- 同じ買うなら、使うなら！「桶谷石鱈」

発行：財団法人PHD協会 理事長 今井 鎮雄  
編集人：藤野 達也  
住所：〒650-0022 神戸市中央区元町通5-4-3  
元町アーバンライフ202  
TEL 078-351-4892 FAX 078-351-4867  
E-mail: phd@mb1.kisweb.ne.jp  
URL: <http://www.kisweb.ne.jp/phd>  
定価：100円  
郵便振替口座：財団法人ピー・エイチ・ディー協会  
01110-6-29688



パプアニューギニア モロベ州 フィンシャーフェン 撮影 FUJINO T.

これは何と言えばいいのでしょうか。  
訪ねた先でもらったやしの実を運ぶための  
このやり方。  
おしゃれな気がしないこともない。

# PHD協会 2006年度 事業計画

## 新しい試みへ

PHDの提唱者、岩村昇先生が亡くなってすでに半年がたちました。25周年を迎える2006年に、先生の「平和と健康を担う人づくり」への思いを、どのように皆さんにお伝えし、形にしていけば良いのかが一番の課題だと考えています。

世界に存在する多くの課題、問題への対処の仕方はいろいろありますが、PHD協会は引続き「人づくり」を基本に活動を行います。海外からは今年度レギュラー3人に加え、秋に短期研修生1人をタイから迎えます。また07年度に初めて日本の他団体との協働で研修生を招く計画を進めており、そのための調査をフィリピンのネグロスで行います。これは、当会が同地区から独自で招いた研修生へのフォローアップにもつなげたいと考えています。日本からのスタッフを現地にもたない当会と、常駐者をおくNGOとの協働にご期待下さい。

また国内の人材育成にも力を入れていきます。これまで海外研修生だけに行ってきた国内社会問題から学ぶ旅を、国内の希望者対象に計画します。また研修サポーター制度を立ちあげ、海外研修生と共に学ぶ方を募っていきたく思います。

いくつかの新しい試みをこの1年かけて行っていきます。  
総主事代行 藤野達也

## 研修

昨年同様、海外からの正研修生の招聘は3人。しかし、昨今の研修生の要望の変化にも対応するため、中・長期的な視野で今後の事業方針を探っていく中で、今年は新しく教育分野にも研修内容を拡大させるなど、新しい取り組みも行っています。また、研修サポーター制度を設け、より研修に特化したボランティアを期待します。

### ■24期生

今年はビルマ、インドネシアに加えてタイから研修生を迎えています。昨年度とは違い、それぞれが異なる分野を専門とすることから、研修生とのコミュニケーションをより密に、時代変化に沿った形で研修生の要望を研修内容に反映できるように取り組みます。また、啓発事業とも連携し、国内研修生やインターンを対象とした社会学習のプログラムなど、国内向けのアピールも強めていきます。

### ■海外調査・フォローアップ

北タイから招聘した研修生（ポーディーヤさん）をサポートすることにより、カレンの布グループへの傾入を行います。

また、従来からの方法に加え、より多くの指導者の方に現地を訪問してもらえるよう、スタディツアーの時期や内容の調整も行います。更に、フィリピンではネグロスでの新規調査を開始し、今後の研修生招聘の可能性を探ります。久しぶりにスリランカへもフォローアップに行きます。

高垣隆博

## 啓発

国際協力を通して、目を向けなければならない国内問題を意識し、日常生活においてできることを共に考えられるよう取り組んでいきたいと思います。多くの人に理解してもらえるように小さな積み重ねを大切にしていきたいと思います。

### ■プログラム

研修生からもらえる“気付き”をたくさんの方と共有したいと思います。より多く、より深く、ボランティアのみなさんに関わってもらい、アイデアをいただきながら、世界とつながる自分たちの生活を見つめ直すプログラムを充実させていきます。

### ■広報活動

広報物の内容を工夫し、マスメディアを利用して多くの人に活動を知ってもらえるよう努めます。9月号で会報、PHD LETTERは創刊から100号を迎えます。より一層喜んでいただける内容を目指します。

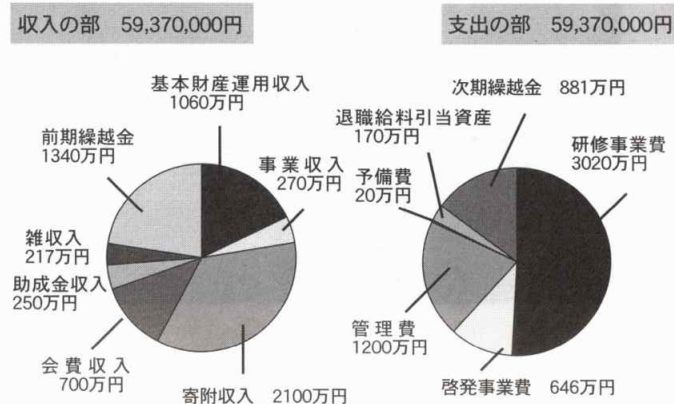
### ■物品販売

タイ・カレンの布は、ポーディーヤさんの存在をいかし、支えるグループソディと連携をして販売します。今年度は、オーガニックコットンTシャツ、絵ハガキにご注目ください。

佐藤栄利子・因幡美奈子

## 総務・財務

### 2006年度予算



■役員、評議員はじめ各地の協力者などから協力を得ていくこと。講演、交流会を通して新規会員の獲得、支援者の拡大のための方策の工夫等に努めていきます。

■依然として寄付金ならびに会費収入で厳しさが見込まれています。寄付金収入では、これまでの協力者・団体に対する取り組みの継続、講演や交流会などからの新規支援層の拡大に努めていきます。

■協力関係にある諸団体との協働によるプログラムやスタディツアーなどの充実を努め、それらを通じてPHD活動への支援者拡大を図ります。

佐々木拓次郎

## 東西南北 問題解決 取組日記

### 停滞する経済は悪いのか。

3年ぶりにバブアニューギニアに出かけた。昨年同時期にも予定を組んだが事情により延期となっていた。今回は農業指導者の中川克敏さんと上田和夫さんのお二人にも同行いただいた。

今回の訪問で一番強く感じたことは、これまでの何回かの訪問に比べ地域の経済活動が停滞しているということだ。

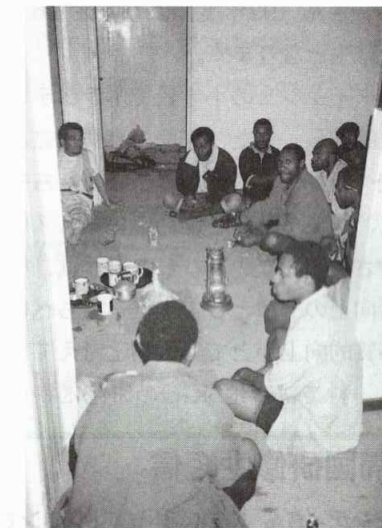
私たちが研修生を招いている地域はモロベ州フィンシャーフエン。首都ポートモレスビーから国内線で1時間飛んだレイから船で4時間弱。そこから車と徒歩での移動となる。港から車で30分程の町ガギドゥにはかつては銀行があり、2軒のスーパーマーケットにも活気があった。ところが銀行は強盗にあってから再開されず、店にもひとりのにぎわいが無い。迎えに出てくれた研修生ハリエオさん（97年度）も、数年前なら村から港まで直接車で来れたが、今は村には車はなく、街道まで数時間歩かないと車に乗れないという。もう一人の研修生ヘルベさん（90年度）の所属するルーテル教会開発奉仕部には、かつて2台の四輪駆動車があったのだが、今はなく、ヘルベさんも仕事で村をまわるのは自前のバイクでだという。

独立30年となるバブアニューギニアにはオーストラリアをはじめとして海外から様々な影響が及んでいる。多くの商品が輸入され、それは村にもやってくる。ところが、それを手に入れるためには、お金がいる。村の自給自足に近い生活では、飢えることはなくてもモノを買うということは、容易ではない。地域ではココナツ、カカオ、最近ではバナナといった換金作物が栽培されているが、すべての村人がかかわるものではない。これまでは、タロ、ヤムといった芋類、バナナが主食だった。そこに米が持ち込まれ、その消費

は広がっている。その多くはオーストラリアからの輸入米である。その米を食べる時は、インスタントラーメンに魚かコーンビーフ等の缶詰と野菜を刻んで煮て汁気のとんだものがオカズになる。まるで日本のマチ暮らしの食卓のような自給率の低さである。

収入と支出がうまくバランスしない。かつて村と港を結んだ乗合いのトラックも、維持費とガソリン代が高く、それを運賃に反映させればお客は減り、今や商売として成り立たず、オーナーがほとんどいなくなってしまっている。

ハリエオさんは街道まで4時間歩いたと言う。かつて村から港までは5キナ（1K=41円）で乗れたのが倍以上となった。村でとれた農作物を持って売りに出ても、交通費で赤字になってしまう。かと言って歩いて運べる量は限られているし、農業でがんばって収穫があったとしても収入にはつながらない。ハリエオさんの村に泊まった夜、彼の農業仲間が集まってきた。何が問題かと尋ねると、口々に「せっかく作っても売ることができない。輸送手段がなんとかならないか」ということだった。



夜に集まってくれたビレッジ・モチィバーターの面々。農業の課題を話し合った。

車が通ることのなくなった道は手入れが行き届かず、荒れていく。悪循環である。

この事態をどう見るか。難しい問題だと思う。お金がまわる生活の利点は

たくさんある。でもそれがまわるためにはいくつもの条件が揃わなければならない。しかもそれを維持しなければならない。それを彼らの生活の中でどうやって確保するのか。でもそれが難しい場合、それが是か非でも手にいれなければならないものなのだろうか。

「なんとかならないか」と尋ねられた時に「どうやったら彼らが車を手に入れられるのか」を考えつつも、本当にそれがいい対応なのかどうかを考えてしまった。日本に住んでいると、どんどん変化していき、新しいものを持つことが当たり前になるが、それは、正しいことなのだろうか。この地を訪ねるたびに考えてしまう。単に車を1台持ち込んで解決するものではない。



ハリエオさん（左）、ヘルベさんは多くの村人の信頼を得ている。

ハリエオさんは日本で稲作に興味をもち、勉強して帰った。先述のようにこの地でも米食が広がる中で、自分たちが作ることができるようになることは好ましい。帰国直後は、水稲をなんとかと取組んでいたが、水田を作り管理することは大変なことである。今回訪ねて聞くと水稲はあきらめ、今は陸稲にし、そこそこの収穫も得ているとのこと。村には、精米所もでき、その管理もハリエオさんの仕事になっている。

PHDの研修は、日本での経験がそのままの形で生きるというより、現地の状況に合わせて研修生、村人の工夫で変化もあって定着させていくことなのだろうと改めて思いつつ、その背後の経済の仕組みにどう対応していけばいいのかも考えていかなければと思う。

総主事代行 藤野達也

# 24期生 来日しました。 どうぞよろしくお祈りします。



神戸YMCAで日本語の勉強中です。左から岩崎正代先生、プットラさん、ポーディーヤさん、スーステインさん。

## スリヤ・プットラさん 男性/インドネシア/22才/ イスラム教

西スマトラ州の州都パダンから車で3時間。標高1100mの山あいの村タラタジャランから。ここには、マスラルさん(05年度)アフリタさん(04年度)アルウィさん(01年度)が日本から帰り、村づくりに取り組んでいます。この地域からの4人目の研修生です。

5人兄弟の3番目、家族で農業(米、野菜、牛)をしています。農業のグループがあり、共同で牛の餌となる草を育て、病気の予防などにも取り組み、また、山肌を効果的に使用するための相談などを行っています。グループのメンバーだけではなかなか良い方法を見つけることができません。

日本では、有機農業を基本に、家畜の病気の予防、そして山の村に住む者として、豊かな山を育てるための勉強を予定しています。

いつも笑顔で好奇心旺盛なプットラさん。5月の初め、スूसーさんとポーディーヤさんの誕生日には手作りのケーキを持って来てくれました。周りにいる人を幸せな気持ちにしていくパワーを持ったプットラさんをこれからもどうぞよろしくお祈りします。

# 研修生レポート

24期生 IN KOBE

## ホストファミリー紹介



小田桐さんご夫妻と真中にスーステインさん。

今回初めてPHD研修生のホストファミリーに手をあげてくれました。休日は、一緒にお買い物に行ったり絵手紙を作ったりしています。

(神戸市垂水区)



プットラさんと高木さん。

以前、タイの研修生ワラヤさん(88年)を短期ホームステイで受け入れてくれたことがあります。プットラさんは、裏庭を耕し、野菜とパイナップルを植え毎朝見るのを楽しみにしているそうです。

(神戸市西区)



朝日さんご家族と後方真中にポーディーヤさん。

ポーディーヤさんは、朝日さんご家族、近所の人と一緒に毎朝6時半からラジオ体操をしています。上の写真は体操の後の清々しい中でのショットです。

(神戸市垂水区)

## 23期生 フィリピン・比較研修旅行

～今後の活躍を期待～ 3月14日～22日

2005年度の比較研修旅行はこれまでよりも約1週間遅い日程で実施されました。

この研修旅行では、地域組織化、そして、有機農業面のフィリピンでの取り組みを学ぶため、現地の3つの団体を訪問しました。

まずはマニラにあるサフルディの事務所を訪問。その歴史や活動について講義を受け、フィリピン国内で活発に活動を行っているNGOの一面に触れました。最終日にも再度訪問し、フェアトレード商品を作っている工場も見学しました。

2日目はいよいよロナルドさんの出身地であるヌエバエシーハ州ガバルドン入り。今年度は22期研修生ハイディさんが中心となり、現地のプログラムを調整してくれました。

ガバルドンでの研修目的は、地域の住民グループGBPの活動現場を見学し、テーさんやマスラルさんが自分たちの村と比較することによって、日本で学んだことを実際に形にするためのヒントを得ることです。

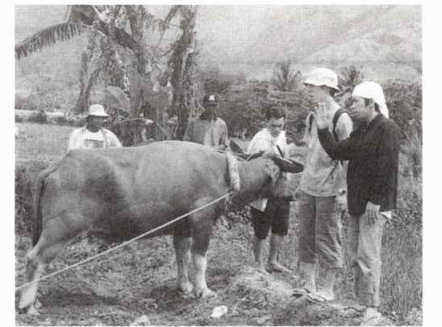
今年度は農業面での取り組みを中心に、保健衛生面での取り組みも見学しました。2人ともGBPの活動の中に自分た

ちの村との共通点や異なる点を見つけるだけでなく、そのメンバーの人間関係までも注意深く観察していただきました。

ガバルドン滞在中、少し足を伸ばして現地のNGOマシバグも訪問することができました。マシバグは、その地域一帯で米の在来種を有機農法で栽培することを積極的に薦めています。テーさんとマスラルさんは、自分たちのところで同じような活動が出来るか、前向きに可能性を考えていました。

ロナルドさんは村での1週間、リーダーシップを発揮しハイディさんと共にプログラムを支えてくれました。現在、活動が少し停滞気味のGBPですが、これまでの研修生と協力して活動を盛り上げてくれることをロナルドさんに期待します。

高垣隆博



## 研修サポーター、引き続き大募集!

### 研修サポーターです!



川原桂さん  
(神戸市・会社員)

「PHD協会」のHPを何気なく見ると「研修サポーター募集」と載っていたので、思わず飛びついてしまった。ビルマ人研修生の通訳や研修のお手伝いができるということで応募したのだ。私はビルマ語を勉強する為に留学し、2年前に帰国した。

帰国してからはビルマ語を使う機会も少なく、神戸に住むビルマ人の友達もいない。ビルマ人の友達ができると下心(?)で参加し始めたが、「PHD協会」の活動に興味を持ち、積極的に参加していきたいと思っている。1年後、彼ら3人が立派に研修を終えた後、私自身が村を訪れ、その活躍ぶりを見るのが楽しみだ。

## 帰国研修生短信

### アンディさん (03年度) フィリピン

4月に第2子誕生。名前はRyu。本人は村での農業とマシバグ(現地のNGO)でも仕事をしています。

### シコンさん (01年度) パプアニューギニア

2月に第1子ガヨンケ君誕生。結婚式は今年の秋の予定。村では農業に加え、3台のミシンで裁縫も。作るだけでなく指導もしています。



同じ買うなら、使うなら!  
NO.4 桶谷石鹸

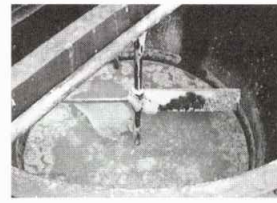
これまで食べるものばかり紹介してきたこのコーナー。今回は食べられない、でも食べたくなるような石鹸を紹介しします。

毎日使う石鹸。現在そのほとんどがマレーシアなどの外国で製造された石鹸の素(=石鹸生地)に、国内で香りを付け、成型したものである。香料・着色料はもちろん、保存性を高めるために多くの合成物質が添加されているのが当たり前である。しかし、そんな中、合成物質を使用しない天然素材のみの石鹸を見つけた。それが桶谷石鹸である。創業昭和26年。大阪市城東区関目町にある工場で、2代目社長兼職人である桶谷正廣さんが頑固一徹、昔

ながらの釜炊き製法で天然素材と手づくりでこだわった石鹸づくりを続けている。

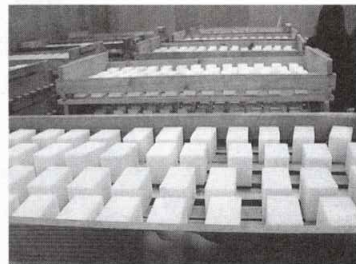
直径2メートルほどの大釜に原材料の牛脂、ヤシ油、苛性ソーダを入れ、煮沸・攪拌。熱加減を指で確認しながら大釜を棒でかき混ぜ、味見して状態を計る。廃液を沈殿させ、ステンレス枠に入れて乾燥させた後、ピアノ線でカット。完成まで10~14日。シンプルな作業のようだが、気温・湿度・材料の性質などに細かな配慮が必要で、職人の技が光る。

社長は「本当の石鹸は生きている。」と言う。天然素材のみの無添加石鹸は2年も3年も保存できないし、保存状態によっては湿度による水分の出入りにより変形するそうだ。また、この



石鹸にはいわゆる「石鹸の香り」がない。これが本当の石鹸であり、私たちが知っている「石鹸の香り」とは香料の香りに他ならないことに気付く。そんな手づくり無添加の「本当の石鹸」は当然人の肌に優しい。実際に洗顔石鹸を愛用しているが、全くつっぱらない。ぜひ一度お試しあれ。

中川知子



白くて豆腐のように見えます。

お問い合わせ先

桶谷石鹸株式会社  
大阪市城東区関目6丁目9番26号  
電話：06(6931)8041  
大丸梅田店13F ハイム化粧品コーナーでもご購入いただけます。

私の訪問記 VOL.5 淡路島モンキーセンター



センター内にある石碑には、人間の犯した罪を悔い改めなければならないという戒めが書かれています。

2月16日、淡路島の南端にあるモンキーセンターを23期研修生と共に訪問しました。このセンターは、山に生息していた野生ザルに中橋実さんが1967年から餌付けを行い、自然な形で人間と猿が良い関係を模索していきけるよう作られました。今日は、延原利和さんに案内していただきました。猿の数は約150頭で山からやってきて遊んだり、昼寝をしたり思い思いに時を過ごしています。

このセンターが開園し餌を与え始め

て3年から5年経った頃、奇形の猿が生まれ始めました。特に手足の障害が多かったそうです。ある猿は足が短い、ある猿は指が多いなどの症状がありました。どうしてなのでしょう？中橋さんは大変苦悩したそうです。

その原因の一つとして、残留農薬があるのではないかとされています。餌として与えるのは、大豆、生ピーナッツなどでした。これらはすべて輸入物でした。日本で栽培する農作物には、厳しい農薬規制があります。しかし、輸入作物に規制はありません。企業は、研究開発した強力な農薬を日本では使用できませんが規制のない海外なら輸出します。そして、それを使って栽培した作物が日本へ輸入され、最終的に私たちの口に入ることもあり得ます。これはブーメラン現象と呼ばれるそうです。

他にも、原因はいろいろ考えられる

ようです。例えば、猿は土を食べる習性があります。日本では、毒性の強い農薬が禁止されています。しかし地球規模で汚染が広がれば当然日本にも影響はあります。土を通じて体内に毒性の物質が入ることも否定できません。現に、猿の肝臓、腎臓からは多量の有機塩素系農薬が検出されているのです。

私たちの周りは、「毒物の海」だと言われています。食べ物、大気、雨など。ちょうど、チェルノブイリ原発事故から20年たちましたが、放射能は風に乗って地球規模で被害をもたらしました。このモンキーセンターにしても私たちと別世界ではないのです。そのことを忘れてはならないと感じる訪問となりました。

因幡美奈子

淡路島モンキーセンター  
〒656-2533 兵庫県洲本市畑組289  
TEL: 0799-29-0112  
<http://www.monkey-center.com>

2006年 PHD スタディツアー  
ゆったりとした時の流れを感じるアジア&国内ツアーで水俣へ

「日本は便利、でも、自分ばかり。」「幸せはお金だけではなく、心が一番の問題。」研修生から寄せられる言葉に、私たちが暮らす日本に目を向けることの大切さを改めて感じています。今だからこそ、自然と共に生き、ゆっくりとていねいに生活する彼らから、私たちは多くのことを学ばなければならないと思います。

今年は海外に加えて新たに国内スタディツアー“水俣”を実施します。水俣での取り組み、そしてそこで活躍する人たちと出会い、日常生活における私たちの生活を考えてみたいと思います。

忙しい日常生活の中、ふと立ち止まってみると新しい何かが得られるはず。研修生の村、水俣を訪ね、これからの暮らしのヒントを探してみませんか。

これまでの参加者より

私はビルマを訪れるまで、発展途上国に同情心を抱いていた。しかし彼らと向き合ってみると、満面の笑みを浮かべ、生命感に満ちあふれていた。  
(03年/ビルマツアー参加/会社員)

日本が、タイの村から学べること。地域の中で人と人とのつながりがすごく強くいたるところで近所さん同士、共同で作業していました。  
(02年/タイツアー参加/教育委員会勤務)

全く違う文化の生活を体験することにより、人間は自然の中で生かされている、ということに改めて実感できました。ゆっくりと時間が流れていた。  
(05年/インドネシアツアー参加/大学生)

タベ村は、インドネシアの中では貧困と言われている。しかし数日間生活を共にして、当然物質的な不便さはあっても精神的にはとても充実して過ごせた。  
(03年/インドネシアツアー参加/会社員)

2006年度 スタディツアースケジュール

- 第8回 ビルマスタディツアー  
日程：7月15日(土) - 22日(土)  
参加費：約21万円
- 第20回 インドネシアスタディツアー  
日程：8月22日(火) - 31日(木)  
参加費：約19万円
- 第24回 タイスタディツアー  
日程：12月23日(土) - 1月2日(火)  
参加費：約19万円

水俣病が公式に確認されてから50年。公害がもたらしたものは何なのか？時代が問いかけています。

- 第1回 水俣ツアー(現地集合解散、相談可)  
日程：8月17日(木)夜 - 21日(月)朝  
参加費：約5万円



4月に新年度を迎え25周年となりました。新しい研修生、多くのボランティアスタッフが集まり、事務所内は活気にあふれています。

23期生 帰国報告会

3月11日、神戸市内で帰国報告会が行われました。それぞれにスライドを交えながら1年間の研修報告を行いました。また、参加者からの質問にも十分に上達した日本語で答えました。

最後は、お世話になったホストファミリーや指導者、ボランティアより励ましのメッセージを受け、涙ぐむ場面も見られました。



WHO ARE YOU?



アメリカからの訪問者です。世界各地で「WHO ARE YOU? あなたは誰ですか?」と、様々な分野の方に問いかけている『AWAKE』という団体からジェフ氏とカメラマンのロブ氏が4月18日に事務所へ。スピリチュアルな質問に苦悩しながらも対応しました。  
<http://www.awakefilm.com/home>よりご覧ください。

**今年度は、Tシャツと絵ハガキが新しくなります。**

アジア・南太平洋の子どもが主役



8枚組 500円

インド産 オーガニック  
素材に2種類のイラスト



ドクター（黒地）



ハウマッチ（白地）

XS、S、M、Lの4サイズ 各2000円

**PHD NEWS**

◆会費・ご寄附寄託状況

2006年 2月	77件	1,288,203円
3月	80件	1,073,590円
4月	60件	507,363円
		217件 2,869,156円

以上の通り、多くの皆様よりご浄財を頂戴しました。ご支援・ご協力に心より感謝申し上げますとともに、引き続き皆様より、会員としてのご協力ならびにご寄附のご支援を賜れますよう努めて参ります。

◆理事会の役員改選

5月11日開催の第58回定例理事会において、役員改選が行われ、理事の金光清行氏が退任し、上田享史氏、安平和彦氏が就任いたしました。また、6名の役員が重任となりました。新理事会は右の表の通り。

理事長	今井鎮雄
理事	上田享史
理事	神木董
理事	米谷収
理事	丹羽修
理事	森滋郎
理事	森本章夫
理事	安平和彦
監事	齋藤貢

◆林業体験合宿-下草刈り-参加者募集

今年も大山振興会とウータンとの共催で7月29、30日の1泊2日で下草刈りを行います。日本の林業の現状や課題を考える合宿です。ぜひご参加ください。

◆今年もNGO相談員です



外務省のNGO活動環境整備事業のひとつ「NGO相談員」の委嘱団体になりました。国際協力活動に関する質問など相談にのります。お気軽にご相談下さい。

**第11期国内研修生募集**

国内でも平和と健康を担う人材を育成しようとして95年より実施している国内研修生制度。今年も1名募集します。

募集要項をお送り致しますのでお問い合わせ下さい。

内容：PHDの事業を通じた実施研修

- 1) 海外研修生の研修事業を軸とする実践
- 2) 国際理解・開発教育等国内に向けた啓発活動
- 3) 公益法人における組織運営

対象：日本国内居住者、日本語でのやりとりが可能で、将来、開発協力・教育・福祉等の分野で働くことを志し当会事務所に通える方。

研修日程：10月より6ヶ月間（週3～5日）  
1月に国内、3月にフィリピンへの研修旅行あり。

時間：原則午前9時～午後6時

支給経費：研修手当及び交通費

選考：書類審査後、筆記・面接  
（9月上旬を予定）

募集締切り：8月18日（金）必着

○月×日のPHD協会

職員 佐藤 連休は指導農家へ修行に。ちょうど子牛が生まれたところで、バケツの乳を飲ませるお手伝い。「母性本能」くすぐられたそう。

職員 藤野 連休は誰もかまってくれないのでひとりで過ごす。家から30分の山に登ったり、銭湯に出かけたり、エコでサスティナブルな過ごし方。

職員 佐々木 連休は家族のお引越しの手伝いで横浜に。そこでがんばりお土産として腰痛を持帰る。医者通い、マッサージと後に引く連休のできごと。

職員 高垣 連休は来日直後のボーディーヤさんのお世話。言葉が通じないので夜7時の約束が朝7時の理解。一緒のはずの夕食を一人寂しく食堂で。

職員 因幡 連休に友人と大阪で映画。終って前からチェックのアジアンレストランへ。「やっぱ私の目をつけたところは」と満足した2件隣がそのお店。

（枕が代わっても早く寝られる順）

◆PHDの活動は会費が支えます◆

PHD会員制度のご案内

終身維持会員：	1口10万円（任意の口数）
PHD会員：	年額 1口5千円（任意の口数）
友の会会員：	年額 1口千円以上任意の額

当会は特定公益増進法人です。  
ご寄附に対する免税の特典

当法人は特定公益増進法人としての認定を得ていますので、ご寄附に対する下記のような特典があります。

寄附者が個人の場合

寄附金合計額（所得金額の25%未満）マイナス1万円が寄附金控除額（所得総額から控除できる額）となります。  
（例）1000万円の所得の人が250万円を寄附されると249万円の寄附金控除。

寄附者が法人の場合

寄附金合計額が一般寄附損金算入限度額の2倍未満までが損金扱いとなります。  
（例）資本金10億で、その年の所得が3億円で1年決算の会社の寄附金の損金算入額は1000万円未満まで（一般では500万円）。

郵便振替口座

01110-6-29688

財団法人ピー・エイチ・ディー協会

**編集後記**

毎年3月、研修生との別れの時期を迎えるたびに1年の短さを痛感し、また「彼らに比べて自分はこの1年でどれだけ変

わったのだろうか」と考えることがあります。研修生が日本の生活に順応し、日本語を習得してしまう早さには驚かされますし、彼らの学ぶ姿を見ていて刺激を受けることも少なくありません。

今年度も新たに3人の研修生がやってきました。それぞれどんな個性を見せて

くれるのか楽しみです。同時に「自分も新しいことを始めよう」という意欲が湧いてきます。研修生の皆さん（と自分自身）がどれほど勉強して次の3月を迎えられるか楽しみです。⑤

制作協力：荒木里奈子 カニ味噌 菅原宗晋  
関美乃里 桃骨